

文化

首の短歌をゆっくりと、時には歌の言葉をリフレイン(繰り返し)しながら読み上げていく。歌の内容によって声音を変え、抑揚をつけて、調べを体感してもらおう。

まず万葉集、その次に自分の歌を読むことが多い。古代の和歌と、現代の歌人である私の短歌をあわせて聴いてもらうのは、日本語の韻律が1

300年にわたって不変であることを感じてもらうためだ。短歌の奥深さを日本語を解さない人にも伝えたいのである。朗読は英語と日本語でおこなうが、その順番は

大人の恋のやるせなさあるいは大伴坂上郎女の恋歌(黒髪に白髪交り老ゆるまでかかる恋にはまだ逢はななく)。大

う個人的な思いが遠い外国の人に共感してもらえたとときの感動は大きい。原発事故後に詠んだ(古里のせせらぎの音を思ひみつストロンチウム沁むる胎盤)は、未曾有の災厄に苦しむ日本人の悲しみを届けたいと思って選んだ歌だ。

海外で短歌の朗読をするようになったのは2005年。私の歌集の英訳者がオーストラリアで自身の本の出版記念会を催した。そこに招かれて朗読をしたのである。俳句が海外でよく知られているのに比べ、短歌の認知度は低い。魅力伝えたいと力を入れて朗読したところ、好評を得て、様々なご縁で方々から声がかかるようになった。

苦勞は多い。たとえば今まさに戦争をしている国で戦争を詠んだ歌を朗読するにはデリケートな配慮が必要だ。タンザニアに行ったときには、朗読を披露するはずだった文化イベントが急に中止になった。ここまで来て何もせずに帰れるものかと現地の大学の先生に掛

三十一文字世界に響け

◇各国で短歌を朗読 古代・現代の心打つ韻律届ける◇

北久保 まりこ

世界各地で短歌の朗読をおこなってきた。今年で13年目。米国、カナダ、フランス、オーストラリア、スイス、タンザニア、インドの33都市を訪問し、公演は132回に及ぶ。世界中に短歌の美しさを伝えたいと思ってきたが、同時にそれは私なりの「短歌への恩返し」でもある。

世界各所で短歌の朗読をおこなってきた。今年で13年目。米国、カナダ、フランス、オーストラリア、スイス、タンザニア、インドの33都市を訪問し、公演は132回に及ぶ。世界中に短歌の美しさを伝えたいと思ってきたが、同時にそれは私なりの「短歌への恩返し」でもある。

楽器使用「間」作る 聴き手を深い世界に引きこむため、楽器も使う。さまざまなような音を立てるシェイカー。雨を思わせる音を出すレインスティック。小さな鉦。撥でたたいたり擦ったりすると空気を静かに震わせる鉄製のパーカッション「波紋音」。楽器を使って朗読に「間」を作り、歌のイメージ



時に応じて変えている。まず英語で意味を理解してもらおうほうが親切かもしれない。だが言葉の響きそのものを聴いてもらうために最初に日本語で読むこともある。

「東の野に炎の立つ見えてかへり見すれば月傾る父の日」。これは私の歌だが、生き別れた父への思いを詠んだ。こういう

個人が個人で短歌を朗読する者。このときは尺八を入れた

母みとった悲しみ歌に私は声がかかればどこにでも行くつもりだし、機会があればどんな場所でも朗読する気でいる。先に「短歌への恩返し」と書いたが、そこには個人的な思いがある。私は母ひとり子ひとりの家庭で育ったが、その母が病に倒れ、病院で死をみとった。母が集中治療室に入っていた17日間、私はその傍でひたすらに短歌を作った。それが自分の支えだった。

母が息を引き取ったあのとき初めて、歌心が聴き手の魂に届くのだと思う。一生かかっても至り得ない境地かもしれないが、努力を続けたい。(きたくば・まりこ) 歌人

米カリフォルニア州の日本庭園で短歌を朗読する筆者